

小学生における「ふつう」(2) —規範への同調／逸脱の観点から—¹⁾

What is “Normality” among Elementary School Students?

The Effects of the Injunctive/Descriptive Norm

佐野 予理子 SANO, Yoriko

● 清泉女学院大学

Seisen Jogakuin College

生井 裕子 IKUI, Yuko

● 桐朋学園女子部門

Toho Gakuen Joshi Bumon

黒石 憲洋 KUROISHI, Norihiro

● 日本教育大学院大学

Japan Professional School of Education

Keywords 「ふつう」、命令的／記述的規範、同調／逸脱、感情状態、小学生
“normality”, injunctive/descriptive norm, conformity/derogation, emotion, elementary school students

ABSTRACT

本研究は小学生計583名を対象に命令的／記述的規範が「ふつう」認知および感情状態に及ぼす影響について場面想定法を用いて検討した。小学低学年，中学年，高学年いずれの発達段階においても，周囲が命令的規範を順守しているときにのみ，自己が命令的規範を順守しているか否かが「ふつう」認知に影響を及ぼしていた。一方で感情状態については，周囲が命令的規範から逸脱しているときに自己が規範を順守していると肯定的感情が高くなることが示された。こうした傾向は，相互独立的 - 相互協調的自己観の程度によってほとんど影響されなかった。命令的／記述的規範が感情に及ぼす影響について

は中学生および大学生以降を対象とした先行研究が周囲と同じ行動をとるときに否定的感情が低く安静状態が高くなるという傾向を一貫して示している。本研究は記述的規範に順じていることが肯定的感情の高さに繋がることを示した。こうした関連は中学生や大学生以降を対象とした先行研究では示されていない。発達の初期段階では同じかどうかという視点から自他を認識し、同じであれば喜ぶという単純な過程が想定されるが、中学生以降になっていくと自他の異同についての認識とそこから生じる感情状態との関連についてより複雑な過程が形成される可能性がある。今後、規範の順守／逸脱が感情状態に及ぼす影響について発達の検討が必要であると考えられる。

The purpose of this study was to investigate the effects of the injunctive/descriptive norm on our sense of “normality” and affective reactions. 583 elementary school students participated in this study. They were asked to rate the sense of “normality” and its affects, by imagining a given situation: when one has conformed to or derogated from a norm, and others have conformed to or derogated from the norm at a school. The story situation in which one (i.e. the respondent) or others have conformed to a norm involved a person walking along the hallway at school. In contrast, a derogation condition involved the situation where oneself or others run along the hallway. The results did not reveal different patterns in the sense of “normality” across the developmental grades (i.e. lower, middle, and higher). That is, only when others observed the injunctive norm did participants report a higher sense of “normality.” On the other hand, however, when others derogated from the injunctive norm and respondents conform to the injunctive norm, a higher positive affect was indicated. These results, especially on affective reaction to the norm, differed from the results of previous studies conducted in junior high school and university students. It is suggested that developmental research about affective reactions toward a norm is needed.

1. 問題

1.1 日本人の「ふつう」心性

日本人は周囲との関係の調和を重視するが故に、周囲の人々の様子を気にし、個性的で独自の存在ではなく、個を主張せず他者と変わらず目立たないことを志向する（阿部, 2002; 濱口, 1982など）。さらに、そのような日本人は、自他の境界があいまいで相互依存的な人間関係を持つとも論じられている（土居, 1971）。つまり日本人には「ふつう」であることを求める心性があると言えよう。こうした日本人文化論が繰り返し論じている指摘と同様の知見が心理学においても示されている。例えば、日本人にはみんなと一緒であることを求める人並み志向や差がつくことを避けようとし、結果の平等を重んじる平準化傾向があることが示唆され（元橋, 1993）、「ふつう」であることに価値を置く人にとって自分が「ふつう」であると思うほど自分のことが好きで価値があると思う傾向

があること明らかにされている（大橋・針原, 2000）。

さらに近年の研究では、日本人が他者との協調を求めると精神的健康との関連について検討が行われている。そこでは、日本人にとって、人と調和したときのポジティブ感情は幸福感として意味づけられるという指摘がなされている（内田・荻原, 2012; Hitokoto & Uchida, 2014）。つまり、「ふつう」という視点から言い換えれば、自分が他者と調和して浮いていない「ふつう」であるときに幸せや満足を感じるということであると考えられる。

一言で「ふつう」と言ってもその意味内容は一義的でない。遂行が平均的であるという意味もあれば周囲と同じで変わっていないという意味もある。さらに、「ふつう」には自らが規範に順じていて適当であるという意味で使用する場合もある。そうした多様な意味を持つ「ふつう」が個人にどのような影響をもたらすのかに焦点を当て、

著者らは様々な場面を設定し「ふつう」であることと感情状態との関連について実証的に検討を行ってきた。大学生を対象とした一連の研究は、概して「ふつう」が否定的感情の低さと安心感の高さと密接に関連することを明らかにしてきた。例えば、遂行が平均的であるという意味での「ふつう」に着目した佐野・黒石（2009）は、周囲の他者と比較した遂行水準が周囲の他者と同程度であるとき、最も「ふつう」であると感じ、かつ否定的感情は低くなり、安心感を抱くことを一貫して示している。また、他者と同じで変わっていないという意味での「ふつう」を取りあげた黒石・佐野（2009）は、周囲の他者と同じ行動をとるときに自分を「ふつう」だと思い、その際に否定的感情が最も低く安心感が高くなることを示した。この研究は、規範に順じていて適当であるという意味での「ふつう」という視点からも論じることができる。規範は、命令的規範と記述的規範の2つに分類される。命令的規範とは大多数の人によって社会的に望ましいと考えられている規範のことであるのに対して、記述的規範は人々が実際にとる行動によって規定される規範のことである（e.g., Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990; Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991）。他者と同じ行動をとる「ふつう」は言い換えれば記述的規範を順守している状況とも言える。

ところで、現実場面においては命令的規範と記述的規範は常に一致している訳ではなくズレが生じることも多い。例えば、横断歩道を渡る際に赤信号になったら渡ってはならないが（命令的規範）、多くの人が赤信号でも横断歩道を渡ってしまふことがある（記述的規範）。それでは、「ふつう」を規定するとも考えられる命令的／記述的規範を順守したり逸脱したりすることは、自分を「ふつう」だと思ふこと（「ふつう」認知）や感情状態にどのような影響を及ぼすのだろうか。さらに踏み込んで言えば、命令的規範と記述的規範のどちらが「ふつう」認知に強い影響を及ぼすのだろうか。

こうした問題意識に基づき、著者らは、命令的

規範が顕著になる状況として葬儀場面（黒石・佐野, 2008 など）、図書館場面（Sano & Kuroishi, 2011 など）、就職面接場面（黒石・佐野, 2007 など）を取り上げて検討した。これらの場面を取りあげた理由は、日本では一般的に、葬儀場面では喪服を着ること、図書館場面では静かにすること、就職面接場面ではリクルートスーツを着ることが命令的規範となっているためである。そうした場面において、周囲の他者／自己が命令的規範を順守／逸脱しているときにおける「ふつう」認知および感情状態について検討した。その結果、どの場面も同様に、記述的規範の方が影響力は大きいことが示された。つまり、自分が命令的規範を順守しているか否かは「ふつう」認知および感情状態にあまり影響せず、周囲の他者と同じ行動をとっているかどうか（記述的規範）が「ふつう」認知および感情状態に影響することが示された。さらに、こうした傾向は周囲の他者が命令的規範に順じているときにおいてより顕著に見られた。

1.2 発達の視点からみた「ふつう」心性

前述した、自分が「ふつう」であることが否定的感情の低さおよび安心感の高さと結びついているという傾向は、大学生のみならず中学生や壮年、高齢者においても同様に見られる頑健で普遍的な傾向であることも示唆されている（佐野・黒石, 2013; 黒石・佐野, 2013 など）。それでは、そのような傾向はいつ頃から形成され、発達してくるのだろうか。

高田（2012）は、周囲との調和を重視し、協調的であることに価値を置く「日本人らしさ」の発達を縦断的および横断的に検討した結果をまとめた。高田（2012）は、幼児期の段階から他者との関係において自己を捉えようとする特質が現れており、児童期になると他者からの受容が肯定的な自己イメージを形成する上で重要であると論証している。さらに、仲間からの受容を求める傾向が相互協調性の高さを規定する可能性があることも示唆している（高田, 2007）。

こうした知見から、幼児のときから他者に対して向く意識があり、成長するにつれ他者への意識

は他者から受容されているかどうかをモニターする役割となっていく可能性が考えられる。実際、高田（2010）は幼児の行動観察を行い、ごっこ遊び等において類似確認（自他の行動の類似性について言及すること）が多くみられることを示した。また、佐野・黒石・生井（2014）は、幼児が自他の類似についてどのように意味づけるのか検討した。その結果、外見や服装、行動が他者と同じであることそのものがポジティブ感情を導くことが示唆された。この結果は、幼児の段階において、他者と同じ行動をとるすなわち記述的規範に順じている意味での「ふつう」がポジティブな意味合いを持っているとも解釈できる。こうした記述的規範の持つ意味合いの発達の変化について研究する必要がある。しかも、発達が進み児童期になると社会的ルールを学ぶ機会があると考えられ、命令的規範に順守しているという意味での「ふつう」の影響についても同様に検討すべき重要な課題であると言えよう。

1.3 本研究の目的

本研究は、小学生を対象として、命令的規範および記述的規範の順守／逸脱が「ふつう」認知や感情状態に与える影響について検討する。

2. 方法

2.1 研究概要

場面想定法を用いた質問紙実験を行った。回答児自身が主人公となるストーリーを呈示し、その場面においてどのように思うか尋ねた。

2.2 回答児

都内公立小学校に通う小学1年生96名（男子45名、女子51名）、小学2年生97名（男子47名、女子50名）、小学3年生95名（男子60名、女子35名）、小学4年生104名（男子43名、女子61名）、小学5年生95名（男子58名、女子37名）、小学6年生96名（男子46名、女子50名）に対し、クラスのホームルーム時に集合調査を実施した。

2.3 質問紙

クラスの教室から運動場に廊下を移動している場面を呈示した。主人公および周囲の友人が命令的規範を順守しているか否かを操作した。具体的には、「廊下は走ってはいけない」という命令的規範の想定に基づき、廊下を主人公が歩いている（命令的規範順守）／走っている（命令的規範逸脱）ときに周囲の友人が歩いている（命令的規範順守）／走っている（命令的規範逸脱）場面の4場面のいずれかを呈示し、その場面における感情状態および「ふつう」認知を尋ねた（すべて4件法）。なお、場面をより想像してもらいやすくするため、小学1年生、2年生、3年生、4年生対象の質問紙には文章での説明に加え当該場面を描いたイラストも呈示した（付録参照²⁾）。

感情状態は、肯定的感情、否定的感情、安静状態の3因子からなる一般感情尺度24項目（小川・門地・菊谷・鈴木、2000）から、小学生が容易に理解できる項目を選択的に使用した。肯定的感情は「たのしい」「元気な」「愉快的」「やる気に満ちた」の4項目、否定的感情は「びくびくした」「おそろしい」「緊張した」「おどろいた」の4項目、安静状態は「穏やかな」「のどかな」「ゆったりした」「くつろいだ」の4項目であった（4件法）。項目選択にあたっては、本研究の第一著者、第二著者、第三著者の協議により行った。さらに小学1年生および2年生に配布した質問紙には、それぞれの感情を表す表情のイラストを各項目の横に配置した。表情はクリエイションアカデミーの表情カード（本田・鈴木、2010）を参考に選択した³⁾。表情カードのイラストの選択にあたっては第一著者、第二著者、第三著者で協議を行い、全員の意見が一致した表情カードのイラストを採用した。

「ふつう」認知は独自に作成した6項目によって測定した。具体的な項目は「ふつうだと感じる」「みんなと合っていてよい」「とけこんでいる」「他の人と比べておかしい（逆転項目）」「まわりの人から浮いている（逆転項目）」「まわりの人からずれている（逆転項目）」の6項目である。

小学5年生および6年生にのみ、個人差要因を測定するため、相互独立的－相互協調的自己観尺

度20項目（高田，1999）に回答させた（4件法）。この尺度は「個の認識・主張」「独断性」「他者への親和・順応」「評価懸念」の4因子からなる。

最後に、場面の命令的規範について（「廊下は走らない方がよいと思う」）および具体的に場面を思い浮かべられたか4件法で回答させた。

3. 結果

3.1 予備的分析

設定した場面の命令的規範について理論的中央値（2.5）との比較を行い、「廊下は走ってはいけない」という命令的規範が内在化されていることを確認した（ $t(569) = 33.54, p < .001$ ）。

また、場面を具体的に想像できていたかについても理論的中央値（2.5）と比較を行った。その結果、回答児は具体的に場面を想像できていたことが確認された（ $t(565) = 13.86, p < .001$ ）。

3.2 命令的／記述的規範が感情状態および「ふつつ」認知に及ぼす影響：発達段階ごとの比較

低学年（1年生および2年生）、中学年（3年生および4年生）、高学年（5年生および6年生）ごとに⁴⁾、感情状態の各因子の平均値および「ふつつ」認知の平均値を従属変数とし、自己2（命令的規範順守、逸脱）×周囲の他者2（命令的規範順守、逸脱）の分散分析を行った。

3.2.1 低学年

各従属変数の平均値および標準偏差を表1および図1に示す。

自己2（命令的規範順守、逸脱）×周囲の他者2（命令的規範順守、逸脱）の分散分析を行った結果、「ふつつ」認知において自己の主効果（ $F(1,184) = 23.57, p < .001$ ）、周囲の他者の主効果（ $F(1,184) = 4.13, p < .05$ ）、自己×周囲の他者の交互作用が見られた（ $F(1,184) = 16.29, p < .001$ ）。自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているより、周囲が命令的規範を順守している方が逸

表1. 低学年における条件ごとの「ふつつ」認知および感情状態

		「ふつつ」認知		肯定的感情		否定的感情		安静状態	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
周囲： 規範順守	自己：規範順守	3.12	0.46	2.34	0.80	1.51	0.70	2.24	0.90
	自己：規範逸脱	2.35	0.64	2.07	1.09	1.91	0.82	1.90	0.88
周囲： 規範逸脱	自己：規範順守	2.60	0.65	1.60	0.78	1.91	0.77	1.87	1.00
	自己：規範逸脱	2.53	0.60	1.68	0.78	1.87	0.83	1.55	0.72

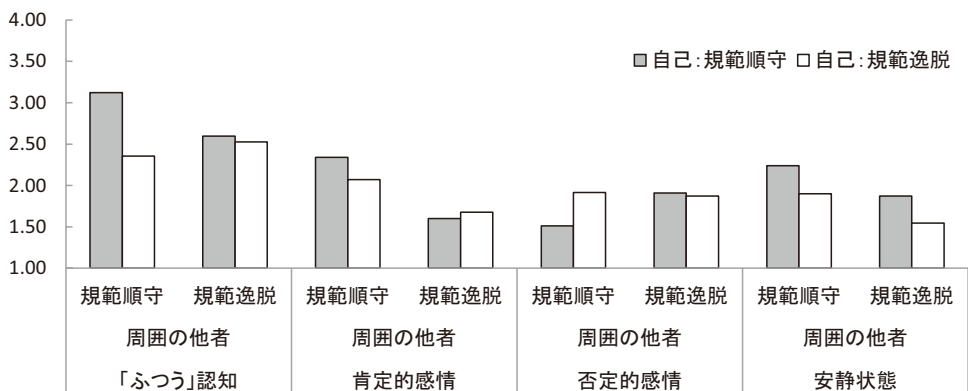


図1. 低学年における条件ごとの「ふつつ」認知および感情状態

脱しているより「ふつう」認知は高かった。交互作用に関して単純主効果検定を行ったところ、周囲が命令的規範から逸脱しているときは自己が命令的規範を順守しているか否かによって「ふつう」認知に違いは見られなかったが、周囲が命令的規範を順守しているときにおいて自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているより「ふつう」認知が高かった。

肯定的感情について、周囲の他者の主効果が見られた ($F(1,184) = 19.66, p < .001$)。周囲の他者が命令的規範を順守しているときの方が逸脱しているときより肯定的感情が高かった。自己の主効果および交互作用は有意ではなかった ($F(1,184) = .57, ns; F(1,184) = 1.86, ns$)。

否定的感情についてはいかなる有意差も見られなかった ($F(1,185) < 2.42, ns$)。

安静状態については、自己の主効果 ($F(1,184) = 6.70, p < .01$) および周囲の他者の主効果 ($F(1,184) = 7.94, p < .01$) が見られた。自己が規範に順じている方が逸脱しているより、周囲が規範に順じて

いる方が逸脱しているより安静状態が高かった。交互作用は有意ではなかった ($F(1,184) = .00, ns$)。

3.2.2 中学年

各従属変数の平均値および標準偏差を表2および図2に示す。

自己2 (命令的規範順守, 逸脱) × 周囲の他者2 (命令的規範順守, 逸脱) の分散分析を行った結果、「ふつう」認知において自己の主効果 ($F(1,195) = 52.18, p < .001$) および交互作用が見られた ($F(1,195) = 77.85, p < .001$)。自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているより「ふつう」認知が高かった。また、交互作用に関して単純主効果検定を行ったところ、周囲が命令的規範から逸脱しているときは自己が命令的規範を順守しているか否かによって「ふつう」認知に違いは見られなかったが、周囲が命令的規範を順守しているときにおいて自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているより「ふつう」認知が高かつ

表2. 中学年における条件ごとの「ふつう」認知および感情状態

		「ふつう」認知		肯定的感情		否定的感情		安静状態	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
周囲： 自己：規範順守	規範順守	3.24	0.52	1.93	0.92	1.22	0.43	2.00	0.89
	規範逸脱	1.98	0.66	1.64	0.80	2.06	0.82	1.46	0.59
周囲： 自己：規範逸脱	規範順守	2.45	0.51	1.50	0.58	1.75	0.59	1.38	0.54
	規範逸脱	2.58	0.50	1.82	0.71	1.59	0.62	1.36	0.56

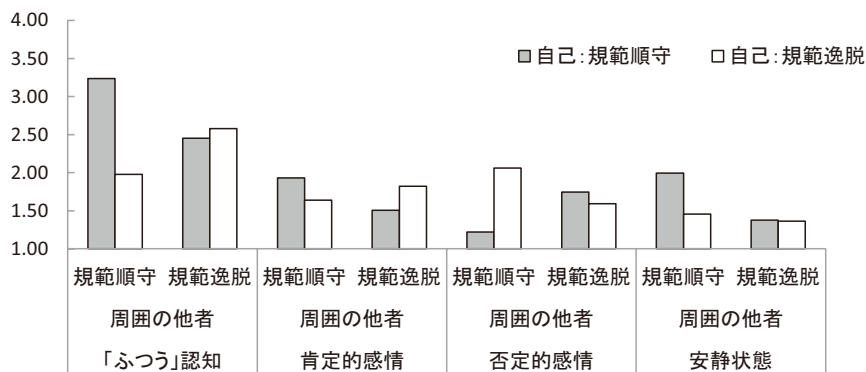


図2. 中学年における条件ごとの「ふつう」認知および感情状態

た。なお、周囲の他者の主効果は有意ではなかった ($F(1,195) = 1.30, ns$)。

肯定的感情については、自己×周囲の他者の交互作用が見られた ($F(1,195) = 7.91, p < .01$)。単純主効果検定の結果、周囲の他者が命令的規範を順守しているときは自己が規範を順守しているか否かによって肯定的感情に違いは見られなかったが、周囲の他者が命令的規範から逸脱しているときは、自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているより肯定的感情が高かった。自己の主効果および周囲の他者の主効果は有意ではなかった ($F(1,195) = .02, ns; F(1,195) = 1.26, ns$)。

否定的感情について、自己の主効果が見られた ($F(1,195) = 14.73, p < .001$)。自己が規範から逸脱している方が順守しているより否定的感情が高かった。また自己×他者の交互作用も見られた ($F(1,195) = 30.53, p < .001$)。単純主効果検定の結果、周囲の他者が規範に順じているときにおいて自己が規範を順守しているより逸脱している方が否定的感情は高かった。なお、周囲の他者の主効

果は有意ではなかった ($F(1,195) = .11, ns$)。

安静状態について、自己の主効果 ($F(1,195) = 8.65, p < .001$) および周囲の他者の主効果 ($F(1,195) = 14.18, p < .001$) が見られた。自己が規範に順守している方が逸脱しているより、他者が規範に順守している方が逸脱しているより安静状態は高かった。さらに、自己×周囲の他者の交互作用も有意だった ($F(1,195) = 7.86, p < .01$)。単純主効果検定の結果、周囲の他者が規範に順じているときにおいて、自己が規範を順守している方が逸脱しているより安静状態は高かった。

3.2.3 高学年

各従属変数の平均値および標準偏差を表3および図3に示す。

自己2（命令的規範順守、逸脱）×周囲の他者2（命令的規範順守、逸脱）の分散分析を行った結果、「ふつう」認知において自己の主効果 ($F(1,187) = 31.40, p < .001$) および自己×周囲の他者の交互作用が見られた ($F(1,187) = 35.64, p <$

表3. 高学年における条件ごとの「ふつう」認知および感情状態

		「ふつう」認知		肯定的感情		否定的感情		安静状態	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
周囲： 自己：規範順守	規範順守	3.17	0.51	1.76	0.81	1.31	0.53	1.92	0.85
	規範逸脱	2.26	0.64	1.56	0.58	1.77	0.68	1.39	0.53
周囲： 自己：規範順守	規範順守	2.55	0.49	1.42	0.53	1.51	0.60	1.49	0.68
	規範逸脱	2.58	0.53	1.81	0.86	1.79	0.70	1.38	0.57

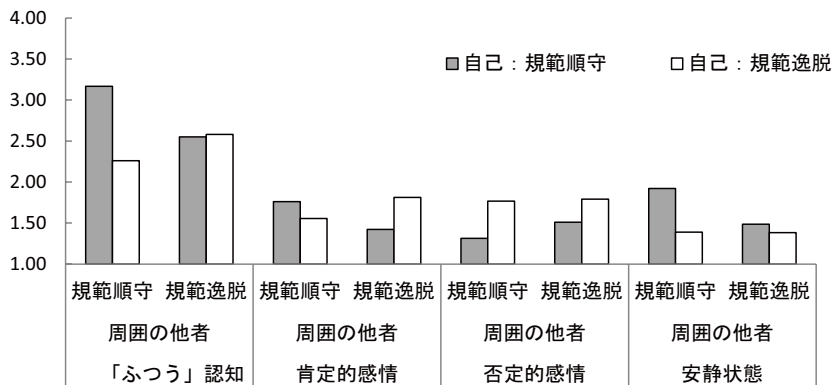


図3. 高学年における条件ごとの「ふつう」認知および感情状態

.001)。自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているより「ふつう」認知が高かった。また、交互作用に関して単純主効果検定を行ったところ、周囲が命令的規範から逸脱しているときは自己が規範に順守しているか否かによって「ふつう」認知に違いは見られなかったが、周囲が規範を順守しているときは自己が規範を順守している方が逸脱しているより「ふつう」認知が高かった。周囲の他者の主効果は見られなかった ($F(1,187) = 3.53, ns$)。

肯定的感情については、自己×周囲の他者の交互作用が見られた ($F(1,187) = 8.45, p < .05$)。単純主効果検定の結果、周囲の他者が命令的規範を順守しているときは自己が命令的規範を順守しているか否かによって肯定的感情に違いは見られなかったが、周囲の他者が命令的規範から逸脱しているときは、自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているより肯定的感情が高かった。自己の主効果および周囲の他者の主効果は有意ではなかった ($F(1,187) = .81, ns; F(1,187) = .15, ns$)。

否定的感情については自己の主効果が見られた ($F(1,187) = 16.09, p < .001$)。自己が規範から逸脱している方が順守しているより否定的感情は高かった。なお、周囲の他者の主効果および自己×周囲の他者の交互作用は有意ではなかった ($F_s(1,187) < 1.47, ns$)。

安静状態については、自己の主効果 ($F(1,187) = 10.70, p < .001$) および周囲の他者の主効果 ($F(1,187) = 5.16, p < .05$) が見られた。自己が規範に順守している方が逸脱しているより、他者が規範に順守している方が逸脱しているより安静状態は高かった。さらに、自己×周囲の他者の交互作用も見られた ($F(1,187) = 4.91, p < .05$)。単

純主効果検定の結果、周囲の他者が規範に順じているときにおいて、自己が規範を順守している方が逸脱しているより安静状態は高かった。

3. 2. 4 高学年における個人差要因の検討

相互独立的-相互協調的自己観尺度の得点についてクラスター分析を行い、2つのクラスターを作成した(表4)。クラスター1の方がクラスター2より4因子すべてにおいて得点は高かった ($F_s(1,188) < 12.09, ps < .01$)。

クラスターごとに、「ふつう」認知および各感情状態を従属変数として自己2(命令的規範順守、逸脱)×周囲の他者2(命令的規範順守、逸脱)の分散分析を行った(図4、図5参照)。

まず、「ふつう」認知においては、クラスター1でもクラスター2でも自己の主効果 ($F(1,84) = 23.17, p < .001; F(1,97) = 8.41, p < .001$) および自己×周囲の他者の交互作用が見られた ($F(1,84) = 25.87, p < .01; F(1,97) = 10.52, p < .01$)。どちらのクラスターにおいても、自己が命令的規範を順守しているときの方が逸脱しているときより「ふつう」認知が高かった。交互作用に関して単純主効果検定を行ったところ、周囲が命令的規範を逸脱しているときは自己が命令的規範を順守しているか否かによって「ふつう」認知に違いは見られなかったが、周囲が命令的規範を順守しているときに自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているときより「ふつう」認知が高かった。いずれのクラスターにおいても、周囲の他者の主効果は見られなかった ($F(1,84) = 1.37, ns; F(1,97) = 3.44, ns$)。

肯定的感情においては、クラスター1において自己×周囲の他者の交互作用が見られたが

表4. クラスターごとの各因子得点の平均値および標準偏差

		個の認識・主張	独断性	親和・順応	評価懸念
クラスター1	<i>M</i>	3.15	2.64	2.86	2.60
<i>n</i> = 88	<i>SD</i>	0.58	0.56	0.55	0.68
クラスター2	<i>M</i>	2.09	1.93	2.60	2.16
<i>n</i> = 101	<i>SD</i>	0.50	0.44	0.50	0.59

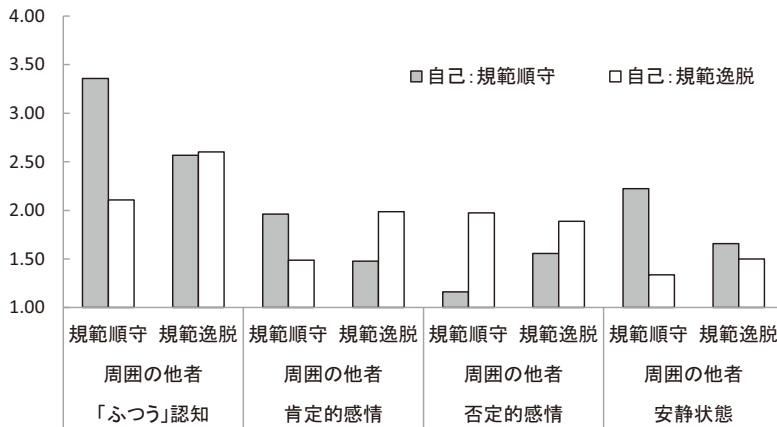


図4. クラスタ1における条件ごとの「ふつう」認知および感情状態

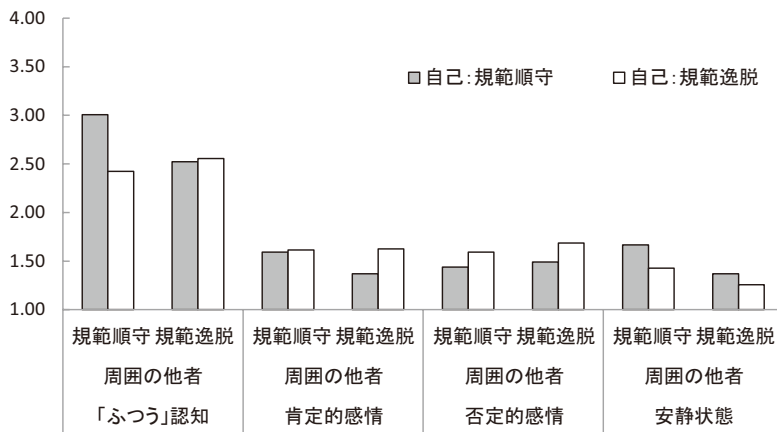


図5. クラスタ2における条件ごとの「ふつう」認知および感情状態

($F(1,84) = 8.21, p < .01$), 自己の主効果も周囲の他者の主効果も有意ではなかった ($F(1,84) = .01, ns$; $F(1,84) = .00, ns$)。交互作用に関して単純主効果検定を行った結果, 周囲の他者が命令的規範を順守しているときは自己が命令的規範を順守しているか否かによって肯定的感情に違いは見られなかったが, 周囲の他者が命令的規範から逸脱しているときは, 自己が命令的規範を順守している方が逸脱しているより肯定的感情が高かった。クラスタ2においてはいかなる有意差も見られなかった ($F_s(1,97) < 1.28, ns$)。

否定的感情については, クラスタ1において自己の主効果が見られた ($F(1,84) = 15.93, p < .001$)。自己が規範から逸脱している方が順守し

ているより否定的感情は高かった。周囲の他者の主効果および自己×周囲の他者の交互作用は有意ではなかった ($F_s(1,84) < 2.83, ns$)。なお, クラスタ2においてはいかなる有意差も見られなかった ($F_s(1,97) < 2.21, ns$)。

安静状態については, クラスタ1において自己の主効果が見られた ($F(1,84) = 10.32, p < .01$)。自己が命令的規範に順じている方が逸脱しているより安静状態は高かった。自己×周囲の他者の交互作用も見られた ($F(1,84) = 5.00, p < .05$)。単純主効果検定の結果, 周囲が規範を順守しているときにおいて自己が規範を順守している方が逸脱しているより安静状態は高かった。なお, 周囲の他者の主効果は有意ではなかった ($F(1,84) = 1.53,$

ns)。また、クラスター2において周囲の他者の主効果が見られた ($F(1,97) = 4.49, p < .05$)。周囲の他者が規範に順じている方が逸脱しているより安静状態が高かった。なお、自己の主効果および自己×周囲の他者は有意ではなかった ($F(1,97) = 2.58, ns; F(1,97) = .33, ns$)。

4. 考察

本研究は児童期にあたる小学生を対象として、命令的／記述的規範が「ふつう」認知および感情状態に及ぼす影響について場面想定法による質問紙実験を行った。

回答児を低学年、中学年、高学年の3つの学年段階に分けて検討した結果、「ふつう」認知に関しては学年段階による相違はほとんどみられなかった。すなわち、いずれの学年段階においても、周囲の他者が命令的規範を順守しているときのみ、自分が命令的規範に順じている方が逸脱しているより「ふつう」認知が高かった。周囲が命令的規範から逸脱しているときは自分が命令的規範を順守しているか否かは「ふつう」認知に影響を与えなかった。こうした結果は、命令的規範の順守に加え、記述的規範にも準じていることが自らを「ふつう」だと思ふことに寄与していると考えられる。さらに、周囲の他者が命令的規範から逸脱しているときには、自分が命令的規範を順守しても記述的規範を順守しても（周囲の他者と同様に命令的規範から逸脱する）、自らを「ふつう」だとみなすことに繋がらないと言える。

感情状態に関しても命令的／記述的規範の影響が見られた。肯定的感情については、特に中学年と高学年において、周囲が命令的規範を順守しているときは自己も同様に順守している方が、周囲が命令的規範から逸脱しているときは自己も同様に逸脱している方が、肯定的感情が高かった。有意差は見られなかったが低学年においても同様のパターンが示唆された。こうした結果は、命令的規範よりも記述的規範の方が肯定的感情への影響力が大きいことを示している。すなわち、小学生にとっては周囲と同じ行動をとることが快感情に

結びついていると考えられる。

否定的感情および安静状態については概ね中学生や大学生以降と同様のパターンを示した。すなわち、周囲の他者が命令的規範を順守しているときにおいてのみ、自らが規範に順じているか否かが否定的感情や安静状態に影響を及ぼしていた。

相互独立的－相互協調的自己観の程度は「ふつう」認知および感情状態に大きく影響を及ぼさなかったが、相互独立的－相互協調的自己観の程度が高い回答児の方が低い回答児より前述の傾向はより強いことが示された。

周囲と同じ行動をとることと快感情の関連は中学生以降を対象に行った先行研究では見られていない（佐野・黒石, 2013; 黒石・佐野, 2013など）。他者との類似性に対する選好は乳児期から見られるという指摘や（実藤, 2009）、他者と同じことが嬉しさを導くという幼児を対象とした先行研究（佐野ほか, 2014）から考えると、発達の初期においては類似性の観点から自他を認識し、似ているもしくは同じであればポジティブ感情が生起するものの、発進が進むにつれて他者との差異性も同時に感情に影響するようになると考えられる。つまり、発進のごく初期では同じかどうかという視点から自他を認識し、同じであれば喜ぶという単純な過程が想定されるが、中学生以降になっていくと自他の異同についての認識とそこから生じる感情状態との関連についてより複雑な過程が形成される可能性がある。今後、自他認識と「ふつう」認知および感情状態との関連について縦断的および横断的な検討が必要だと考えられる。

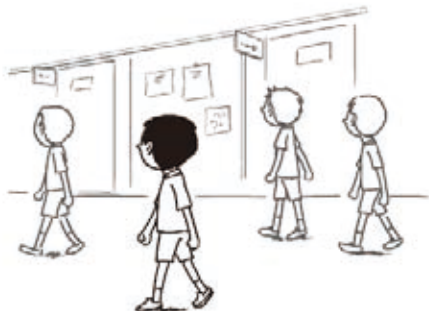
安藤・依藤・大沼・杉浦・菊池（2010）によると、大人より子どもの方が記述的規範の影響が大きいとされる。これは自分自身の価値観が確立されていないため、子どもの方が親や友人からの影響を受けやすく、他者からの影響に対して敏感であるためである（安藤ほか, 2010; 安藤・依藤・大沼・杉浦, 2009）。子どもから大人になるにつれて命令的／記述的規範の影響がどのように変化していくのかさらなる研究が望まれる。

注

- 1 本研究の一部は日本発達心理学会第24回大会(2013年 明治学院大学)において発表された。
- 2 本研究で使用したイラストはすべて付録として掲載した。掲載したイラストは研究のために限り利用して構わない。
- 3 表情カードの使用を許可して下さったクリエーションアカデミーに感謝申し上げます。
- 4 質問紙の構造自体は学年によって相違はないが、構成に関しては完全に同一ではなかったため、低学年(1年生・2年生)、中学年(3年生・4年生)、高学年(5年生・6年生)ごとに分析を行った。

引用文献

- 阿部勤也(2002). 世間学への招待 青弓社
- 安藤香織・依藤佳世・大沼進・杉浦淳吉(2009). 親から子への環境配慮の規範・行動の伝播: 縦断的研究(1) 日本社会心理学会第50回・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会発表論文集, 344-345.
- 安藤香織・依藤佳世・大沼進・杉浦淳吉・菊地真理(2010). 社会規範が子どもの環境配慮行動に及ぼす影響: 親子ペアによる分析 日本社会心理学会第51回大会発表論文集, 704-705.
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 1015-1026.
- Cialdini, R. B., Kallgren, C. A., & Reno, R. R. (1991). A focus theory of normative conduct: A theoretical refinement and reevaluation of the role of norms in human behavior. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, 24, 201-234, New York: Academic Press.
- 土居健郎(1971). 甘えの構造 弘文堂
- 濱口恵俊(1982). 間人主義の社会日本 東洋経済新聞社
- Hitokoto, H & Uchida, Y (2014). Interdependent happiness: Theoretical Importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies*, DOI 10.1007/s10902-014-9505-8.
- 本田恵子・鈴木真理(2010). 表情カード クリエーションアカデミー
- 黒石憲洋・佐野予理子(2007). 「ふつう」であることの安心感(4) 日本心理学会第71回大会発表論文集, 208.
- 黒石憲洋・佐野予理子(2008). 「ふつう」であることの安心感(6) 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 274.
- 黒石憲洋・佐野予理子(2009). 「ふつう」であることの安心感(2): 集団規範からの逸脱という観点から 国際基督教大学学報 I-A教育研究, 51, 43-54.
- 黒石憲洋・佐野予理子(2013). 「ふつう」であることの安心感(12): 世代間比較研究 日本心理学会第77回大会発表論文集, 147.
- 元橋豊秀(1993). 人並み志向と平準化志向 社会心理学研究, 9, 1-12.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人(2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, 71, 241-246.
- 大橋恵・針原素子(2000). 自分を「ふつう」だと認知することは自己評価を高めるか? 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 20-21.
- 実藤和佳子(2009). 他者の中に自己をみる: 自他の類似性が拓く初期発達の可能性 心理学評論, 52, 36-45.
- 佐野予理子・黒石憲洋(2009). 「ふつう」であることの安心感(1): 集団内における関係性の観点から 国際基督教大学学報 I-A教育研究, 51, 35-42.
- Sano, Y & Kuroishi, N (2011). How do you feel when you are normal at a library?: Cross-cultural study between China and Japan. Poster presentation at the 9th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, at Yunnan Convention Center, in Kunming, China.
- 佐野予理子・黒石憲洋(2013). 「ふつう」であることの安心感(13): 高校生の場合 日本心理学会第77回大会発表論文集, 152.
- 佐野予理子・黒石憲洋・生井裕子(2014). むり絵にみる幼児の自他類似性および差異性の認識 清泉女学院大学人間学部研究紀要, 11, 3-11.
- 高田利武(1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 — 比較文化的・横断的資料による実証的検討 — 教育心理学研究, 47, 480-489.
- 高田利武(2007). 文化的自己観尺度の諸問題 — 尺度値の意味と自尊心の関連 — 宮城学院女子大学研究論文集, 101, 25-40.
- 高田利武(2010). 日本人幼児の社会的比較: 行動観察による検討 発達心理学研究, 21, 36-45.
- 高田利武(2012). 日本文化での人格形成 — 相互独立性・相互協調性の発達の検討 — ナカニシヤ出版
- 内田由紀子・荻原 祐二(2012). 文化的幸福感 — 文化心理学的知見と将来への展望 — 心理学評論, 55, 26-42.



付録 1. 男子用イラスト：自己規範順守
—他者規範順守



付録 2. 男子用イラスト：自己規範逸脱
—他者規範順守



付録 3. 男子用イラスト：自己規範逸脱
—他者規範逸脱



付録 4. 男子用イラスト：自己規範順守
—他者規範逸脱



付録 5. 女子用イラスト：自己規範順守
—他者規範順守



付録 6. 女子用イラスト：自己規範逸脱
—他者規範順守



付録 7. 女子用イラスト：自己規範逸脱
—他者規範逸脱



付録 8. 女子用イラスト：自己規範順守
—他者規範逸脱